

I - B - 20

麻黄附子細辛湯エキスの肝細胞障害抑制作用

大阪市立大学医学部第三内科¹⁾、同第一生化²⁾、大阪社会医療センター³⁾

○阪上吉秀，溝口靖紘，申 東桓，小林絢三¹⁾，森澤成司²⁾，山本祐夫³⁾

麻黄附子細辛湯は，麻黄，細辛，炮附子の3種の生薬から構成される漢方方剤であり，抗アレルギー作用を有することから，感冒，気管支炎，および，アレルギー性鼻炎に用いられている。麻黄は，マオウ科 *Ephedra sinica* の地上茎であり，主成分は，ephedrine, pseudo-ephedrine, norephedrine などのアルカロイドとタンニンである。発汗作用，鎮咳作用，中枢興奮作用，交感神経興奮作用，抗炎症作用，抗アレルギー作用を有している。細辛は，ウマノスズクサ科ウスバサイシンの根茎部であり，精油 (methyleugenol), asarinin を主成分とし，解熱鎮痛作用，抗アレルギー作用を有する。炮附子は，キンポウゲ科カラトリカブトの塊根を減毒処理したものであり，主成分は，aconitin, hypaconitine, mesaconitine, higenamine, coryneine などのアルカロイドであって，鎮痛作用，強心作用，血管拡張作用，抗炎症作用，抗ストレス潰瘍作用を有する。今回は，免疫学的に誘導した肝細胞障害に対する麻黄附子細辛湯の保護作用について検討した。

方法 Wistar 系ラットの肝を摘出し，分離肝細胞浮遊液 (1×10^6 cells/ml) を調製した。この細胞浮遊液に，麻黄附子細辛湯より抽出した水製乾燥エキス (小太郎漢方，0.5, 1, 5, 10, 50, 100, 200 μ g/ml) を添加して，37°C，6時間，前培養した。培養後，肝細胞障害性を有する活性化マクロファージ培養上清¹⁾ および [³H]-ロイシンを添加して，さらに16時間培養し，肝細胞への [³H]放射活性の取り込みを測定することによって，肝細胞の蛋白合成を観察した。

結果 活性化マクロファージ培養上清を添加したときの肝細胞への [³H]放射活性の取り込みは抑制されたが，麻黄附子細辛湯の前処理によって，この蛋白合成阻害は，有意に軽減された。

結語 麻黄附子細辛湯エキスには，活性化マクロファージ培養上清中に含まれる肝細胞障害因子が誘導する蛋白合成阻害を解除する作用が認められた。以上の結果より，肝細胞膜障害に対して，麻黄附子細辛湯がなんらかの保護作用を有することが推測された。

〔文献〕 1) 溝口靖紘，森澤成司，山本祐夫他：和漢医薬学会誌 6：947，1983